

ナンノタメニココニイルノカ

（ブル一三・七、八）

先日テレビドラマ「風の少年」尾崎豊「永遠の伝説」を見た。ほぼ同世代であるから見てみると高校時代に戻ったような感じがして何やら懐かしくなったのだが、その際私の脳裏にリフレインしていたのが彼の代表曲の一つ「十七歳の地図」の一節「何のために生きてるのか判らなくなるよ」であった。生きる目的を考えるが、それが見つからない。しかしその苦しみの中でもなお人生の目的を問い続け、人波に流されながらも必死に自分を失うことに抗い続けた尾崎氏の姿は今となっては少々色あせてはいるが、確かにあの日ティーンエイジャーの代弁者であった。

閑話休題。何事でも「何のためにここにいるのか」という問いをもつことは大切である。目的のない漂流のような人生はつらいからだ。そしてこれはクリスチャン生活においても然りである。「なんとなく」「漫然と」ここに来たというのではない。今朝は先ほど読んだ聖書から、私たちが各地からここに集められた理由を2つ考察したい。

Ⅰ．師の姿を観察し思い起こす為に

七節には神の言葉を語った指導者たちのことを思い起こすようにという指導が書かれているが、この指導者たちとは十一章に書かれている所謂「信仰の勇者たち」の事を指すのではない。むしろこの手紙の読者たちを直接指導し、天に召された牧師・伝道師のことを指している。さらにこの手紙の著者は特にその指導者たちの生涯の終わりを「しつかり見る」よう勧めている。このことばは使徒一七・二三にパウロがアテネの町でおびただしい数の偶像を見、その中から「知られざる神に」と書かれた銘板を見つけたときに用いられている。つまり注意深く観察するという意味が含められているのだ。

では私たちが大坂牧師の人生を、特にその最後を注意深く観察したときに見えてくるものはなんだろうか。死ぬ間際までベッドに隠し持っていた（！）イカの燻製では当然にない。それは彼の愛すべきキャラクターの一端を示すものでしかない。私たちが今、この礼拝において思い起こすべきは教会宛の最後の二通の手紙に書かれていた「God is good all the time, All the time, God is good.」である。そこには病気による心の憂いや自己憐憫は一切なく、神の善性をひたすらに信じる、一本の木のような信仰がある。一方において大坂牧師は

極々普通の人間であった。生来の短気者であり、家族への愛の表現もまことに不器用であった。病を得てからも食欲に歯止めがかからず、自制がきかないこともあった。しかしながら、こと良きお方である神に対する信頼にかけては人後に落ちない存在であり、その「信仰によって」彼は今もお語っているのだ。

Ⅱ．イエス・キリストを礼拝する為に

だがこの愛すべき大坂克典牧師はもう居ない。死んだのだ。そして「去るものは日々疎し」という言葉のとおり、師の思い出も否応なく風化していく。しかし八節においてはその現実を超える唯一無二の存在が提示される。それが私たちの主イエス・キリストである。そして私たちがこの「昨日（過去）・今日（今）・永遠（未来）」という枠組みでヘブル書全体を見ていくときに、そこには確かに過去の地上の生涯において、苦しみ折りつつ、使命に殉じていく人間イエスの姿が（五・七）、またその苦しみを受けたゆえに今も私たち人間の状況を常に理解してくださる大祭司イエスの姿が（四・一五）、さらに永遠に生きていて、私たちのためにとりなしを続けるイエスの姿（七・二五）がはつきりと浮かび上がってくる。

私たちは最早大坂克典牧師と握手をすることは出来ない。日曜の朝、旧牧師

館にどつかり腰掛け、説教の最終調整をしている姿を見ることもかなわない。また突如としてバタニヤ館の扉に手を置いて「地境が広げられますように」と祈っている姿を見ることもない。だが彼をそのように生かし、信仰を与え、そのレースを走り抜かせた存在、つまり信仰の創始者であり完成者であるイエス・キリストにアクセスすることは常に可能なのだ。私たちが台所で、ベッドの上で、また教会で師が教え続けた一言の祈りを実践するなら、私たちは大坂牧師を生かしたイエス・キリストに即つながることが出来るのである。ハレルヤ！

父の死のあと、私の人生も大きく変化した。八月には神学校の教師から教会付きの牧師になり、更に今年からは牧会に専心することになった。しかし私たちの愛すべき信仰の先導者であった大坂克典師の生き方を仔細に観察するとき、そういうことは実に大きな問題ではないということに気づかされる。私たちにとって大切なこと、それは師の思い出をかみ締めつつ、どんなときも良いお方である神を礼拝し、その栄光を顕して生きること、それだけである。

わたしの詩よ

ついにひとつの称名であれ

（八木重吉）

ペテルキリスト教会牧師 大坂太郎